

「沖縄基地問題は本土と地元民のねじれが原因では？」

平成 27 年 12 月 8 日

●みずぐもさんからの質問

西田先生こんにちは。沖縄（日本）の問題について質問します。沖縄のメディアなどでは盛んに基地問題を取り上げて差別だと言われています。基地を受け入れない本土がおかしいとなっています。しかしそのことで考えたのですが、このねじれとも言える現象は、第一に本土での占領期間中の出来事を忘却している（知ろうともしない）自立しようとしないう本土の人間と（アメリカ製の価値観で固められているという）本土の状況を知らずに沖縄で起こった基地になる土地の接収などの占領期間中の出来事はメディアなどで認識している沖縄県民との間にある認識（沖縄戦での出来事も一部で差別の理由にされている場合もありますが）状況認識の相違が原因であって単純に差別で片付けられない話なのではないかと思っています。分かりやすく言えば、沖縄は歴史的経緯からして我慢の限界だというのに対して、本土側は米軍基地は必要だけど（占領期間中の経緯を引くまでもないですが日本に他国の基地があること自体問題なのに）自分たちのところは嫌だという話で終始しているというもの。認識が同じなら自分で自分の国を守る方法を議論できるのに、する土台すら整っていない。この本質はその認識のねじれを解消した上で自分の国はどう自分たちで守っていくかを何々県民とか関係なく議論することが必要なのではないかと考えていますが、西田先生の私の意見に対する感想とこのねじれの原因などについてのご意見をお聞かせください。

●西田昌司の答え

大東亜戦争中の当初は沖縄に基地はありませんでしたし、防衛を担っていたのはサイパン等の南の島に設置された基地でしたが、昭和19年にサイパンが陥落したりとそれらの島がどんどん敵の手に落ちていきました。そんな中、沖縄に滑走路を作ろうという議論が出たり、あるいはもう沖縄を守る余力も日本には残されていないので沖縄は見捨てようといった議論が出たりと話が二転三転しました。最後はやはり沖縄は見捨てられないということで沖縄に基地を作り出していったのですが、そこをアメリカに攻撃されて沖縄は焦土の地と化しました。そんな沖縄を救うために戦艦大和が沖縄への片道切符の特攻に出て玉砕したのですが、地上戦の現場となった沖縄では兵隊だけでなく一般の県民にも十万人に上るとも言われる犠牲者を出してしまい、本土と比べて悲惨な戦争体験をしたのです。

昭和20年に戦争が終わってGHQの占領が始まり、7年後の昭和27年に日本は主権を回復しましたが、それ以降も沖縄だけはアメリカの施政権下の状態が続いてしまい、沖縄が本土復帰を果たしたのは20年後の昭和47年となってしまいました。結局、沖縄は占領時代が27年も続いてしまいましたし、その間に沖縄に米軍基地がどんどん作られていったのです。これら米軍基地は日本の防衛のためというよりもアメリカの世界戦略の一環でありましたし、ベトナム戦争時にはこれら基地が使われたりもしました。

沖縄県民は、本土防衛のために多大な犠牲を払った上に戦後は基地を押し付けられて本土復帰が20年も遅れてしまったという理不尽さを感じられているでしょう。もちろん、中国の侵略から守るためにも沖縄に基地が集中するのはある程度はやむを得ないことを理解されている賢明な沖縄県民も沢山いらっしゃいますが、占領の延長線上の色合いの強い空間に今も沖縄があるのは事実です。

普天間基地の周りには民家が立ち並ぶ状態となっていますが、危険除去のために辺野古へ基地を移転させようという計画が持ち上がったのはもう20

年も前のことです。長い説得を経て沖縄県民にも一定の理解を得られたかという頃、民主党が政権をとって鳩山氏が首相になると、彼は沖縄の米軍基地について「できれば国外、最低でも県外」と無責任にも言い放ってしまい、これまでの沖縄県民への説得が一気に水泡に帰してしまったのです。この発言については今でも憤りを覚えますし、沖縄県民にかけた迷惑を考えると誠に申し訳ない気持ちで一杯です。翁長現沖縄県知事は元々は自民党の議員でしたし、沖縄県民への粘り強い説得の過程についてはよくご存じのはずなのですが、今では辺野古移設反対の急先鋒として発言されていますし、怒れる沖縄県民の気持ちを代弁しているつもりなのでしょう。

今の状況を考えると普天間を辺野古に移設するのがベターな選択だとは思いますが、しかし将来的には米軍に安全保障を頼るのではなく「自分の国は自分で守る」という当たり前の国の道を進まなければなりません。そのためには、米軍基地は徐々に縮小してその代わりに自衛隊を配備する方向に何十年をかけてでもやっていかなければなりません。今すぐにそのようなことが実現できるわけではないことは沖縄県民にも理解していただかなければなりません。

本土の人間も沖縄の歴史について学ばなければ沖縄の苦しみ・悲しみ・憤りを理解できませんが、そのような教育がされていないのが非常に大きな問題だと思います。今年は終戦70周年でしたが、テレビ等で戦争に関する映画が放送されましたので私もそれらを見ていろいろと考えさせられました。沖縄に一方的に負担を押し付けるのではなく、沖縄を理解してともに歩もうという気持ちを本土の人間も持たなければなりませんし、私も本土の人間としてそのように訴えていきたいと思っています。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>